

岬之町だより

第2回「菊四郎がゆく」

日本銀行 下関支店長 岩下 直行

先月号の「岬之町だより」に書いたとおり、日銀下関支店の北側の通りは、明治時代には藪之内通りと呼ばれていた。日銀の隣にある功德院というお寺の石段下の石碑に、この岬之町の古い地名が残されている。その石碑の横に、もう一本、より古く小さい石碑が立っていて、そこには「真木菊四郎殉難の地」と彫られている。この人物はいったい誰だろうか。

下関に転勤してきてこの石碑を見るまで、その名前を聞いたこともなかった。とはいえ、毎日勤務するオフィスのすぐ近くで殉難した歴史上の人物のことを知らないままにいるのも気が引けたので、図書館に行つて何冊か歴史書を調べてみた。

真木菊四郎は久留米藩出身の幕末の志士である。父は久留米水天宮の二十二代宮司で、幕末の尊攘派の理論的指導者としても名高い真木和泉（まきいずみ）。菊四郎は和泉の四男で、父和泉が京都で尊王攘夷の活動を進める中、父の手足となつて奔走した。若くして亡くなったため、彼個人に関する記録は多くはないが、宇高浩が昭和九年に著した労作「真木和泉守」には、息子である菊四郎の活動内容や遭難の経緯が書かれている。

それによれば、菊四郎が歴史の舞台に登場するのは文久二年（一八六二年）二月、弱冠二十歳の時である。和泉に従つて久留米を脱出、薩摩を経由して京都に上り、薩摩藩の尊攘派とともに倒幕のための挙兵を計画する。しかし、同年五月二十一日、決起の直前に、京都伏見の船宿、寺田屋に集結していた薩摩藩士を、島津久光の命を受けた別の薩摩藩士が襲撃、壮絶な同士討ちとなり、和泉、菊四郎らも巻き込まれる。世に言う寺田屋騒動である。寺田屋の奥で和泉が菊四郎と決別の杯をかわしている時に、騒動が発生したという。事件後、和泉、菊四郎らは薩摩藩に拘留され、その後、久留米藩に送還されてしまう。

この時期、久留米藩は公武合体説をとり、幕府に忠誠をつくす立場であった。和泉と菊四郎は拘禁、謹慎となったが、京都の尊攘派公卿からの働きかけもあつて赦免される。

文久三年（一八六三年）、和泉、菊四郎らは長州を経由して再び上京する。和泉は京都の政局をリードする長州藩を理論面から支える存在となる。和泉は、天皇が自ら先頭に立つて外敵を打ち払う「攘夷親政」の必要性を説いた。この案が採用され、同年八月十三日、大和巡幸の詔勅が発せられた。これは、天皇を立てて

大和に兵を挙げ、倒幕の狼煙を上げようという計略であつたらしい。

ところが、その直後、同年八月十八日に、公武合体派の公卿と薩摩、会津がクーデターを起こした。大和巡幸は中止となり、長州藩は京都での政治勢力を失つてしまう。和泉は長州藩に、尊攘派公卿七人を長州にお連れすることを提案し、菊四郎らとともに長州に下つた。世に言う七卿落ちである。

この失地回復のために、元治元年（一八六四年）七月、長州藩が起きたのが禁門の変（蛤御門の変）である。和泉は浪士隊を率いてこれに加わり、菊四郎も従軍した。しかし、薩摩、会津らの連合軍に敗れ、長州軍は敗走、来島又兵衛、久坂玄瑞らは戦死し、和泉も京都山崎の天王山で自害することになる。菊四郎もその後を追おうとするが、父に諭され、長州・下関に逃げ延びる道を選択する。

長州に移つた後、菊四郎は、亡き父の遺志を継いで、薩長連合による攘夷倒幕のために奔走する。菊四郎は薩摩とのつながりも深かつたので、幕府による第一次長州征討の際には、広島に征長総督参謀の西郷隆盛を秘かに訪ね、薩長連合への協力を求めた。その後、菊四郎は西郷と同船して下関に移動し、同年十二月十一日の薩長首脳による密談にも同席した

という。

しかし、薩摩に近いとみられたことがあだとなった。慶応元年（一八六五年）二月十四日、下関において、菊四郎は薩摩に恨みを抱く三人の土佐脱藩浪士に呼び出され、薩摩との関係を難詰された上で殺害されてしまう。この遭難の地が、岬之町敷之内であったらしい。享年二十三歳、志士としての活動期間は僅か三年間であった。

久留米で真木家が代々宮司を務めてきた水天宮という神社は、下関とも深い関わりがある。水天宮には、壇ノ浦の戦いで亡くなった安徳天皇や二位の尼が祀られているからだ。由緒によれば、壇ノ浦の合戦の後、平家方の官女、按察使局（あぜちのつぼね）伊勢が久留米に落ち延びて、安徳天皇と平家一門の霊を祀る祠を建てたのが、水天宮の始まりだという。真木家はその子孫にあたる。つまり、菊四郎は平家の末裔ということになる。

このため、菊四郎は生前から、下関在住の知人に「自分が死んだら、阿弥陀寺に葬って欲しい」と頼んでいた。阿弥陀寺は壇ノ浦の戦いで亡くなった安徳天皇と平家一門の菩提を弔う寺で、現在の赤間神宮にあたる。この遺言により、菊四郎は阿弥

陀寺裏の紅石山に葬られた。

この墓は現在も残っている。下関市中之町の引接寺裏から紅葉館（藤原義江記念館）まで石段を登り、その裏山の雑草に覆われた山道を更に登ると、山頂部分に三本の墓石が建つ、静かな空間が広がっている。最も古い墓石には菊四郎の名前のみが彫られている。その前に、より新しい「贈従四位真木菊四郎之墓」と彫られた墓石が立つ。明治維新が成った後、幕末の志士として官位が追贈されたことを示す墓標である。もう一本は、幕末の政商で、赤間神宮二代宮司でもあった白石正一郎の奥都城（おくつき。神道のお墓のこと）を示す石碑である。

ところで、菊四郎は誰に斬られたのだろうか。一坂太郎の「竜馬が愛した下関」によれば、下手人は土佐脱藩浪士の池内蔵太（いけくらた）だという。内蔵太は禁門の変に長州方として参加した浪士で、自分達を苦しめた薩摩に対する憎悪が激しく、薩長連合を画策する菊四郎が許せなかったということらしい。宇高浩の著書にはその名前は明記されていないが、これは内蔵太もまた、天誅組の変や禁門の変で尊皇攘夷運動に身を投じた志士として維新後顕彰され、従四位を追贈されているため、暗殺

者として名指しするのを避けたということらしい。

内蔵太はNHKの大河ドラマ「龍馬伝」にも登場する龍馬の幼馴染で、この暗殺事件の後、長崎の亀山社中に参加することになるのだが、これは薩長が急速に接近する中で、菊四郎の暗殺に関与した内蔵太の立場が悪化し、龍馬を頼って長州を脱出せざるを得なくなったのではないかと一坂太郎は推察している。宇高浩は菊四郎の暗殺者が、「肥前五島沖にて台風にあい、船は転覆して海底の幽鬼と化し去った」とも書いているが、これは亀山社中のワイルウエフ号が、慶応二年（一八六六年）五月二日、五島沖で沈没し、内蔵太が水難死したという史実とも合う。

「龍馬伝」の影響もあり、下関でも坂本龍馬ブームが起きている。龍馬は、薩長盟約を仲介した人物として日本史の教科書にも登場する。だが、こと薩長連合構想については、別に龍馬オリジナルの提案ではない。雄藩、特に薩長の連合によって勤皇倒幕を果たすべきだと率先して唱えていたのは真木和泉であった。菊四郎は、父が唱えた薩長連合構想を受け継ぎ、薩長が矛を交えた禁門の変の直後から、両藩の関係修復を働きかけていたが、それが原因となって暗

殺されてしまった。

もしも、菊四郎が慶応元年に暗殺を免れていたら、その僅か一年後の薩長盟約の成立を受けて、尊皇攘夷の志士としての彼の地位はより高まったことだろう。あるいは、彼こそが、龍馬に先駆けて、薩長連合に貢献した人物として、歴史に大きな名前を残していたかもしれない。そうならば、司馬遼太郎は「竜馬がゆく」ではなく「菊四郎がゆく」を書いていたらかもしれないし、大河ドラマも「龍馬伝」ではなく「菊四郎伝」になっていたかもしれない。そんな空想を膨らますのも楽しい。

菊四郎は、現在の下関では、岬之町の石碑と紅石山の墓碑にひっそりとその名を残すのみだ。幕末の志士の中には、若くして亡くなり血すじも絶えてしまった人が珍しくない。しかし、菊四郎は二人の娘を残した。長女さきは、菊四郎の兄、真木主馬の養女となり、結婚して子をなし、和泉と菊四郎の血すじが後代に続くことになった。菊四郎は二十三歳の若さで非業の死を遂げただけに、そんな後日談を聞くと救われる思いがするのである。